

日本ギヤスケル協会（編） 『創立 30 周年記念 比較で照らす ギヤスケル文学』

大阪：大阪教育図書、2018 年、4,000 円、288 頁

直野 裕子

本書は、日本ギヤスケル協会創立 30 周年を迎えるにあたって企画された記念論文集である。収録された論文は 20 編、3 部構成で、第 1 部「ギヤスケル世界の真価と発展」（6 編）、第 2 部「同時代人と切り結ぶ」（6 編）、第 3 部「時空を超えての交流」（8 編）からなる。順不同で見していきたい。

ギヤスケルの代表作『クランフォード』を論じたのは 3 編。冒頭の章で、足立万寿子氏は、ニューマンの「紳士論」と異豊彦の「紳士像」を援用しながら、クランフォードの住人それぞれの行動・発言・心理から窺える「紳士性」と「人間性」を検証し、最後に町の住民ではなく庶民階級の、クランフォードの世界を客観視できる語り手メアリ・スミスに「マティーさんのそばにいと皆『いい人間』になったような気がする」と言わせていることに注目する。「いい人間」とは、キリストのような人が想定され、紳士階級であっても知性・教養の点では庶民並のミス・マティーをキリストのような慈愛に満ちた人物とし、人の価値は「紳士性」ではなく「人間性」にあることが示されていて、そこにギヤスケルの紳士概念の真髄をみる。手堅い論考である。大前義幸氏は、喜劇的作品として漱石の『吾輩は猫である』と比較し、二つの作品に共通する喜劇的表現法を探る。人間とは異次元の世界にある猫を語り手としたその効果について詳細な分析がされるが、メアリ・スミスの語りの分析は少々物足りない。漱石は『文学論』で、例のディケンズとジョンソンを巡ってミス・ジェンキンズとブラウン大尉が大論争する箇所を引用しているが、劉熙氏は、伍光建の中国語訳『克蘭弗』（1927）では、1919 年の五四運動の結果大きく変革した中国社会に受容され易いように、内容上の修正が加えられていると指摘し、その例としてこの論争場面を取り上げる。訳

者が注を付けて自分の解釈を入れるのは当時よく行われたことで、ディケンズを褒めるブラウン大尉に対して、ディケンズをけなしジョンソンを模範にすべきだと偉そうに言うミス・ジェンキンズを‘very pedantic and antiquated’と訳者がけなすのは、印刷技術の進歩や識字率向上の波に乗り、下層階級にまで読者層を広げたディケンズを評価し、中国でも印刷技術や言語が改革され、古臭い伝統や文学にとって代わるべく外国作品を平易な口語に翻訳し読者層を広げようとしたからだを見る。この古いものを排除しようとする姿勢に比して、ヴィクトリア朝の社会変化を認めながら古いものも排除せず共存をよとするギヤスケルの態度を‘ambivalent’とみなす。

『メアリ・バートン』は出版当初、経営者と労働者の対立を激化させていると批判されたが、江澤美月氏は、ギヤスケルを高く評価した雑誌『エグザミネー』の編集者リー・ハントに注目し、彼が中流階級や労働者階級の生活を圧迫するトーリー党の保護貿易政策「穀物法」の撤廃に貢献した人物で、バンフォード（暴力的側面を持つチャーチスト運動と袂を分かった労働者階級の反穀物法論者）やフォックス（マンチェスターの中流階級の反穀物法論者）を高く評価したこと、この二人をギヤスケルが支持していたことがリー・ハントとの書簡のやり取りから窺えることから、この小説が階級間の対立ではなく融和を目指していることを明らかにする。松浦愛子氏は、劇作家D. ブーシコーによる『メアリ・バートン』の翻案劇『ロング・ストライキ』（1866）を取り上げ、ハビトゥス概念を援用し、当時の劇評を多数分析して観客の受容の実態を明らかにする。ウェスト・エンドの観客が共感し涙する同じ場面で、イースト・エンドの労働者たちは抱腹絶倒するなど中産階級とは違う反応を示していると指摘し、『メアリ・バートン』は労働者の生活をリアルに描いていると一般に評価されているが、実際は虚構であったことが労働者の反応から見受けられるという。石塚裕子氏の論考も、『メアリ・バートン』のリアリズムの実態を問うもの。メアリが出会う人たちはみな善良で、行く先々で親切に助けられ万事うまくいくリヴァプールは、メルヴィルの『レッドバーン』の舞台、奴隷貿易の拠点であり多文化の錯綜する国際都市リヴァプールとは明らかに異質で、それはギヤスケルが黒人を描かなかった点に典型的に表れていると見る。ギヤスケルの意識の中でのリヴァプールは、「ナッツフォードと変わらぬ信頼するに足るコミュニティで、家父長制度の保護のもと正義の支配

するコミュニティの規範に守られると信じているようで」、田舎のコミュニティを離脱した孤独な個人、よそ者の集まりの都会は、「中産階級の女性ギヤスケルには、この時点ではまだ（と論者は注意深く限定している）縁の薄い世界で、人種差別が露骨な形を取るのアメリカ……イギリスではヴィクトリア朝お上品文化に隠され見え難くされていただろうし、小説は家庭で読まれることを前提としていたからであろう」と結論づける。

『ルース』は、「墮ちた女」の救済問題を扱った社会小説の範疇には収まらない作品として様々な読み方がされてきたが、芦澤久江氏はルースの激しい懊悩、自己矛盾に焦点を置き、『ジェイン・エア』のジェインや『嵐が丘』のキャサリン、あるいは意識の流れ手法を使う V. ウルフの小説とも比較して、また新たな『ルース』の読みの可能性を論じる。西村美保氏は家事使用人サリーに焦点を当て、「墮ちた女」と「善良な女」の対比を通してサリーの役割を綿密に検証。健全な判断力・倫理観を備え勤勉で主人に忠実なサリーは「善良な女」の権化で、「墮ちた女」の地位の低さを示すだけでなく、情報の提供者、さらにルースの生き様と世間の冷たい仕打ちについての証言者となる。「ギヤスケルが世間全体に対する間接的な抗議の言葉を社会の片隅に生きる女性使用人に語らせていることに注目した」好論文である。宇田朋子氏は『ルース』を M. ドラブル『礪白』（1969）と比較する。社会への鋭い観察眼を備えるドラブルのリアリズムがヴィクトリア朝小説への憧れから生まれたこと、両ヒロインとも未婚の母で、イギリスで婚外子が嫡出子と同等の権利を得るのは家族法改正（1987）後であることを示した上で論を進める。時代の隔たりは 100 年以上、社会状況も違うが、社会常識に乏しかった両ヒロインが、妊娠して産むと決心し以後一般社会の常識を学び人間的に成長し、父親と一緒に暮らせる機会があったのを拒絶する点などに共通点を見る。濟木愛子氏は『ルース』と『シルヴィアの恋人たち』から、「水」に関連するイメージを抽出し、登場人物との関連性を分析。「流れのない水」のイメージがルースの悲しみ・拒絶・絶望を描写する場合に用いられる傾向があり、『シルヴィア』では海に関連する「流動する水」が中心で、外的・内的意味を表す修飾語が付くものが多く、シルヴィアの喜怒哀楽は水のイメージに結びつく指摘する。

鈴木美津子氏は、ディズレイリの『シビル』（1845）と『北と南』（1855）のプロット展開、作品の枠組みなどを分析し、両作品が国民小説の特徴をもつことを指摘

し、その共通の影響源を探る。支配層には博愛を労働者には服従を説く青年イングラッド党の政治理念が織り込まれた『シビル』、ギャスケルのユニテリアンとしての政治的・宗教的思いと批判（英国国教会が非英国国教徒に歩み寄る寛容さが必要だという思いと、南部の英国国教徒中心で行う政治への批判）が示される『北と南』、政治的メッセージは対極にあっても、両作家とも若い頃最も人気のあったスコットの国民小説を読破し、その「プロット展開、枠組み、小説技巧に魅せられ…構造や技巧の似通った作品を生み出すことになった」のだろうという。詳細な分析と検証に基づいた手堅い論考である。木村正子氏は、ギャスケルのナイチンゲール姉妹との交流が、『北と南』執筆にどのような影響をもたらしたかを、これまで看過されてきた姉パーセノップとの親交に注目しながら考察する。ギャスケル作品におけるヒロイズムは、「ヴィクトリア朝の〈家庭の天使〉の行動指針である自己犠牲と他者への献身の実践」と「神への奉仕に示される愛の実践」であるが、神の召命を受け狭く閉鎖的な家庭空間からの脱却を目指し、看護活動に専念するカリスマ的英雄のフローレンスに対して、その活動を献身的に支える家庭の天使的姉パーセノップ、そのどちらについても行き過ぎを肯定しないギャスケルは、マーガレットに両方の役割を担わせ、「強い意志で決意するだけでなく、感謝して祈ることも真の英雄の条件だ」との認識に至らせ、「活動と休止/沈思」というバランスの取れた新しいヒロイズムのもとに社会活動に入らせていくのではないかと結論づける。

松岡光治氏は、作品の時代が1840年の郵政改革以前と以後に設定されたディケンズとギャスケルの作品を取り上げ、プロットの仕掛けとしての手紙と犯罪、特に脅迫の問題に焦点を置いて両作家を比較する。『妻たちと娘たち』（1820年代設定）の土地管理人プレストン、『ルース』（1830年代設定）のベリンガム夫人も息子も、その罪は赦される。ディケンズの『リトル・ドリット』のリゴー、『互いの友』のライダーフードなど良心のない悪人の脅迫は因果応報で処罰される。とりわけ手紙が作品の構成やテーマに深く関わる『荒涼館』（1852-53）の、準男爵デッドロック家の顧問弁護士タルキングホーンの脅迫は、金銭や愛情に関係しない心理的・精神的なもので、その複雑なメカニズムについての詳細な分析は圧巻である。『ドンビー父子』（1846-48）以降、ディケンズの悲観的な社会観がさまざまなイメージや象徴で示されるが、ギャスケルの場合、『クランフォード』（1851-

53) の語り手メアリ・スミスが、「ピーターの母親が出しても届かなかった過去の古い手紙を受け継ぎ、新たに書き直した手紙を送って」彼をインドから帰国させ肉親関係の断絶を修復するという「郵政改革の功績を体現させるようなプロット」を展開させていることから、「ギヤスケルは基本的には未来志向の楽観主義者」と見る。果たしてそう言い切れるかどうか、今後の課題でもあろう。

一般に歴史小説と見なされる『シルヴィアの恋人たち』を、西垣佐理氏はフィリップの恋愛物語として読み、その恋と挫折の顛末を、ディケンズの『大いなる遺産』のピップの場合と比較することによって、ヴィクトリア朝イギリス社会での男性性確立の問題を考察する。男性性確立に必要な三要素のうち、「仕事」で一定の成功をおさめても、「家庭」（恋愛や夫婦関係）では、両者共、相手の女性を偶像視し一方的利己的思い込みで愛そうとして挫折。その後の運命が大きく異なるのは、もう一つの要素「男性同士の絆」の有無にあり、ピップには義兄や男性の友人との絆があって挫折から立ち直れるが、フィリップにはそのような絆がなかったために、悲劇的結末を迎えることになり、その意味で、この作品は男性的恋愛の破壊的側面を徹底して描いたものであるとみなす。死の間際に、フィリップとシルヴィアが互いに非を認め赦しあう点を重視するのが大野龍浩氏の論考“Moralization in Elizabeth Gaskell’s Later Fiction”である。多くの批評家の、ギヤスケルの教訓主義の要素は創作技量が円熟するにつれて減少するという見解に異議を唱え、後期の作品 *Sylvia’s Lovers*, *Cousin Phillis*, *Wives and Daughters* においても、一貫して教訓主義 (moralization/didacticism) は存在し浸透していることを、テキストを聖書に照らし合わせながら丁寧に跡付け、それはギヤスケルが作品を信仰告白の手段にしているからだろうと結論づける。

次に中・短編についての論文に移ると、石井明日香氏は、乳母が語り手である「ばあやの物語」と『嵐が丘』を取り上げ、「ばあやの物語」には、『嵐が丘』にはない語り手と主人との信頼関係があり、両者間の愛情と協力の可能性が強調され、そこにギヤスケルの独自性を見る。興味深い論考だが、もう少し整理して論を進めてほしい。太田裕子氏は、ギヤスケル同様ユニテリアンで18世紀末から19世紀初頭に活躍し高く評価されたが、長らく看過されていて最近再評価され始めたロマン派詩人アナ・バーボルド (1743-1825) の詩を引用して、その思想・社会観を詳細に解説。ギヤスケルが「私のフランス語の先生」、『ラドロウ卿の奥

様』の時代設定をバーボルドの活躍した時期にした、その真意を考察するという最初に掲げた目的が、スペース不足からか、十分果たせていないのが惜まれる。猪熊恵子氏は、短編集『ソファを囲んで』（1859）が、雑誌に連載された既出の短編をただ寄せ集めただけのものではなく、ギヤスケルが巻頭とそれぞれの作品間に杵物語の構想を挿入することにより、6作品が円環的に繋がって新たな作品世界を創り出していることを丁寧に跡づける。「杵」部分の語りを引き受けるミス・グレイトレックスは、病氣治療にエディンバラに行き主治医の姉、障害を抱えソファに寝たきりのミセス・ドーソンの知己を得て、彼女の周りに集う知識人たちそれぞれが語る話に耳を傾け、書き留める（『ブロンテ伝』への猛烈な抗議、次女の婚約解消も加わり心身ともに疲弊したギヤスケルと傷心の娘の姿も重なる）。それぞれの語る物語群は、それぞれに響き合い重なり合い溶け合い、その繰り返しの中で、語る者も聞く者も少しずつ癒されていくという。新たな作品世界が創出されていくメカニズムを詳細に分析し読み解いた優れた論考である。

木村晶子氏は、ギヤスケル同様、ユニテリアン派知識人の間で育ったアン・ラドクリフの『ユドルフォの謎』を取り上げ、ギヤスケルがこの作品をどのように継承しているかを考察。中・短編ではラドクリフの作品設定やモチーフ、人物像が取り入れられるが、ラドクリフの亡霊には後に合理的説明がされるのとは違い、ギヤスケルの亡霊は、現実において隠蔽された心理の深層や闇に葬られた悪を露わにする機能を持ち、家父長制の矛盾や不正が表現され、リアリズムによる長編では描けなかった深層心理や抑圧されたセクシャリティが投影されており、ラドクリフの最も肯定的な「ヒロインの成長物語」というプロットを継承しているのは、労使対立を軸としたリアリズム小説『北と南』であると指摘。時代風潮の相違も視野に入れ、詳細な分析がされた説得力ある行き届いた論考である。

鈴江璋子氏は、「アメリカの奴隷制度廃止に向けて」ギヤスケルが最もはつきりした態度を示したものとして、冒頭に、弱冠26歳でただ一人の白人指揮官として、初めて組織された黒人連隊を率い、最前線で戦死した北軍の大佐への追悼文『ロバート・グールド・ショウ』（1863）を取り上げたと思われる。青年の死を悼みその母の嘆きを思いやる個人的なものと従来考えられているが、政治的見解を含まないとは言いきれない。ギヤスケルはもともとキリスト教徒として奴隷制度に反対しているが、「言葉によって論理的に提案された、しつかりした、明

瞭な、実際のな＜行動の道＞があるのでなければ」(U319)と述べた言葉を引用し、奴隷解放運動には積極的ではなかった理由を示唆する。『アンクル・トムの小屋』(1852)がアメリカだけでなく、世界的に反響を巻き起こし奴隷制批判が高まり、ストウは招待されてイギリスを訪問し、ギヤスケルとも出会う(1853)が、二人の関係は表面的なもので終わる。それは、ギヤスケルは職人氣質、ストウは直感・直言型という「気質の違い」からだと見る。両者とも乳幼児期に実母を失い、母となっては幼い男児を疫病で失うなど共通点が多いが、後の家庭に特に問題がなかったストウに比して、ギヤスケルは父親と後妻の家に入れられず心に深い傷があると指摘し、「家庭小説の中に物の怪が潜むような感覚、失踪のテーマ、生霊などを持ち込み」、「人間の裏面を書くことができる」優れた作家だと高く評価する。この論考は、ギヤスケルが好きだった「豊かな広がりを持った話」「いろいろ話が詰まった」物語のようで、楽しく読むことができた。

日本ギヤスケル協会創業者山脇百合子先生は、この記念論文集を手になされて、さぞお喜びになっただろう。百歳の天寿を全うされたのはその半年後のことであった。2010年、15年、そして18年出版の論文集すべてに執筆されたのは、編集委員長を3度とも務められた大野龍浩氏を含めて9名である。その並々ならぬギヤスケル愛好家魂に心から敬意を表したい。

どの論考もギヤスケルの作品の新たな面を浮かび上がらせたり、思いがけない読みを示したりして、大いに刺激を受けた。各論文は独立したものであるが、他の論文と共鳴し重なり合い補完し合って、ギヤスケルの多様性、豊かさを彷彿させる。次のステップを目指そうという熱意と意欲に溢れた論考が多かったが、少々気になることがある。選んだテーマは秀逸で資料も豊富、英語はよく読めていると思われるのに、日本語の文章がわかりにくい、そんな論文が散見される。ぜひわかりやすい日本語を書くようにしていただきたい(自戒をこめながらの提言です)。

(甲南女子大学名誉教授)